

子どもを守る
文化会議 沖縄集會

3月20~22日

関係者に聞く

●下

沖縄集會開催に向け、実行委員会のかけ取り役を務める加藤彰彦(沖縄大学教授)と、沖縄子ども研究会(会長)に、沖縄の子育ての現状や集會の意義などを聞いた。

進む子育て「日本化」

— 沖縄の子育ての現状は。

「沖縄には、子どもたちが集団の中でお互いに学び合い、地域の中で『自ら育つ』文化が残っている。日本(本土)が失ってしまった『生活環境、自然環境の中で子どもが育つ』という、子育ての原点をまだ持っている。しかし、近年は子育ての『日本化』が進み、『大人の思い通りにしたい』という風に変わりつつある。その変化の中で、子どもたちが苦しみ始めている」

— 「日本化」とは。

「戦後、日本の子育ては大産・消費の資本主義社会で『大人が期待する人材に子どもを育てる』という考えに変わった。子どもの主体性を尊重せず、親の思いを押し付ける子育てだ。学校教育を通して大人のリズムに合わせて子どもを育てようとするため、登校など親が期待する人間像に合わない子どもが増えるという矛盾も生じた。その流れが、近年の沖縄でも起きている。相手を生かす関係性の中で育つという文化から、自分の思いを相手に押し付

け、相手を思い通りにしようとする文化に変わりつつある」

— 「日本化」で沖縄の子育てはどう変わったか。

「沖縄では近年、子どもをめぐることでこれまでになかったような事件が起きている。大きな事件で言うと、2003年に父親が子どもを死なせた児童虐待死事件。04年には北谷町で少年の集団暴行死が起きた。この事件は被害者を殺して死体を埋めている。2事件を見ると、親子や友人など親しい間柄で、自分の思いを遂げるために相手を殺した。非常にショックな出来事だ。今、沖縄は子育てをてこに、沖縄の文化を取り戻すべき時期に来ている。本土に合わせず、沖縄の文化や環境に合った独自の子育てや子ども政策、子ども教育論をつくる、一つのターニングポイントだ」

— 今回、沖縄で全国集會を開く意義は。

「集會は課題ごとに16の分科会に分かれている。各分科会では、沖縄の子どもたちを取り巻く貧困や暴力、基地問題などに取り組み現場関係者、発達障害の子を持つ親などの当事者が、それぞれの厳しい現状を明らかにする。それを行政に認知させ、具体的な政策につなげる第一歩にしたい。そして、その様子を全国に発信する。全国の人々が、子育ての制度やプランをそれぞれの地域や自治体で独自につくる必要性を考えるきっかけにしたい」

加藤 彰彦 沖縄大学教授



沖縄の文化・環境に合った子ども政策の必要性を訴える加藤彰彦(沖縄大学教授)

文化、環境に合った政策を

— 那覇市国場の沖縄大学

(聞き手・山城祐樹)



子どもを守る文化会議・沖縄集会
に向け準備する実行委員会メンバ
ーら14日、沖縄大学

子ども文化会議 開催へ準備着々

進行状況など確認

20日から沖縄大学を拠点に始まる第55回子どもを守る文化会議・沖縄集会（同集会実行委員会主催）の準備が大詰めを迎えている。14日は同大で開かれた準備会に約40人が参加し、分科会の進行状況や会場設営などを確認した。高里鈴代共同代表は「子どもを主人公

に平和を願う集会にした」と呼び掛けた。

加藤彰彦同大教授は「戦後や基地の問題で、沖縄が全国的、世界的に注目されている中、その環境下で育てている子どもたちの問題の重要性も認められ始めている」と指摘し、子どもを支える仕組みづくりの必要性を強調した。

20日は全国から来県予定の約100人を中心に、基地周辺を巡るオプショナル

ツアーが行われる。21日午前10時に沖縄尚学高校体育館で開会し、講演会やシンポジウム「子どもたちを通して見えてきた『沖縄』」が開かれる。22日は沖縄大で分科会や全体集会が開かれる。21、22の両日は当日参加できる。参加費は2日間で一般2千円、学生千円、高校生以下無料。

問い合わせは沖縄大学ゆいまーる室☎098(833)7311(仲渡)。